

沖縄の火の神、仏壇、墓、御嶽から祖先祭祀を見る

古 家 信 平*

はじめに

「沖縄」(ウチナー)は県名でもあるが、沖縄県内の各地で「沖縄」の指し示す意味合いに違いがあり、宮古・八重山では沖縄本島の呼称である。ここでは沖縄本島を中心とした地域の事例を取り上げることにはしたい。タイトルにあるように火の神を祖先祭祀との関連で扱うことに違和感を持たれるかもしれないが、家庭の主婦は毎月旧暦の一日と十五日には火の神と仏壇を連続して祭り、そうした宗教実践のあり方からは仏壇と同一視される存在でもあった。御嶽も祖先祭祀との関連に疑問を持たれるかもしれないが、仲松弥秀によれば、どの村にも村を愛護する神としての御嶽があり、遠い時代のその村の拝所であり石灰岩地帯の立地する御嶽にはよく神骨がみられる。

ここで具体例として主に取り上げるのは、沖縄本島北部東海岸に立地する名護市久志・辺野古である。最近では沖縄本島中部の宜野湾にある米海兵隊の基地の移転問題でマスコミに取り上げられることも多く、沖縄の新聞誌上では毎日その動向が報じられている。私が初めて辺野古に行ったのは1973年の夏のことで、その当時は海岸に基地との間を仕切るフェンスもなく、旧暦3月3日の浜降りの行事の時には大勢の集落の人々が海に入ってウニや貝を収穫して楽しんでいたものである。1990年代に基地の移転が現実のものとなって、集落内が賛成派、反対派に分かれて対立するように

なり、外来者に対しても警戒感をもって接するようになってしまった。以前のように、本土から来たと知ると、何かやってあげようという温かい気質が失われつつあることは残念である。

琉球国の時代から久志にノロがおり、辺野古を祭祀管轄区域とし、辺野古には神女組織のトップにネガミ(根神)がいて集落の祭祀を主宰する。行政区としては久志と辺野古の間に豊原がある。ここは土族層が寄留してできた屋取集落で、聖地や神役はいない。

火の神の二分類

安達義弘は火の神を「政治火神」と「民俗火神」に分類している。前者は琉球王府の政治機構の装置として機能するものとしており、尚真王(在位1477~1527)の時代に聞得大君一三平等の高級神女一各管轄地域の神女という階層ができた。折口信夫が指摘したように三平等殿内の火の神から本国の神を遥拝し、管轄地域の火の神から三平等殿内への遥拝が行われ、各レベルの地域統合の象徴として機能した。

琉球国全体の地誌である『琉球国由来記』(1713)には、久志・辺野古に関し「久志巫火神」の年中祭祀として、「毎年三・八月、・・稲二祭三日崇、年浴・柴指・・仙香・花米五合宛・神酒五器宛(久志・辺野古ニヶ村百姓)供之。久志巫祭祀也。」とある。毎年決まった時期に百姓が供物を用意して、ノロが火の神に祭祀を行っていたことが分かる。今日、久志集落の東のはずれにノ

*筑波大学・名誉教授

ノロ殿内があり（写真1）、石三つに象徴される火の神が祭られ（写真2）、その南に祭場である神アサギがあり、年中祭祀が行われている。ノロは戦後二代目の方が本年3月まで実修されていたが（写真3）、今は引退され後任は決まっていない。辺野古には女神役のトップにネガミ（根神）がいて、ネガミヤ（根神屋・写真4）に火の神を祭っている（写真5）。辺野古の神アサギは、辺野古の草分けの家とされるトゥンチの横にある。



写真3 ノロ殿内で祭祀を行うノロ（白衣装）



写真1 久志のノロ殿内



写真4 ネガミヤ（根神屋）（改築前のもの）



写真2 ノロ火の神（一番右）



写真5 ネガミが祭る火の神

もう一つの「民俗火神」は各家庭の台所で主婦によって祭られ、竈や今日ではガスレンジの近くに香炉が置かれている。もともと大きな石を三つ

鼎状に立てて、それを炉として使っていたのが、竈を使うようになってから三つの石を並べて竈の上において火の神の象徴とした。その名残で香炉の後ろに小さな石を三つ並べている家庭もある。女性が転居するなどで家庭を離れるときに香炉を持参する。

折口信夫は琉球の神道の根本観念を「おとほし」にあるとし、香炉それ自体を神体とみなすのではなく香炉を通して遠く隔たったところの神を拝むというのである。家レベルでは女が旅行するときには香炉を持って行き、他国に移住するものは分けて携えて行って、いずれも香炉を通して郷家の神を拝すのである。「政治火神」に見た久志ノ口は久志間切を管轄していた首里の真壁殿内の真壁大阿母志良礼（マカンオオアムシラレ）が祭る火神との間で「おとほし」をしていたのである。

火の神をまつる女性

沖縄の特別養護老人ホームの生活指導員の間であるうわさが広がっている。「入園者の中にある時期になるとソワソワし、一過性の徘徊行動をするものがある」というのである。近藤功行は沖縄本島内の38施設を訪問し次の事実が判明した。

- ① カルテからは精神科疾患の既往はない
- ② 旧暦一日十五日ころになると起こる
- ③ 女性に限られる

とりわけ明治期生まれの女性に多く、その時期になると気持ちが落ち着かなくなる「チムサーサ」（チムは「こころ、気持ち」、サーサは「そわそわ」）状態に陥っていた。沖縄では女性が結婚後「火の神様」を拝むことが重要な役割とされていた。そこで注意すべきことは、単に形式的に拝むのではなく、家族の問題など内面の葛藤を火の神に訴える自己精神分析の場でもあった、ということである。日常生活の中で嫌なことがあったり、困ったことがあったときなどに火の神を拝むことで、深い自己解放の場ともなっていた。そのため「これ

をやらないと気が済まない」という女性も多い。自分の内面を切り開くことによって、さまざまなメンタルヘルスのシステムを旧暦一日と十五日を利用して活用しているのがこの儀礼で、生活においては重要な位置を占めていると思われる。この儀礼が人生の中で構築され、ある時点でその継続が途絶えたときに不協和音が生じる。そこで表出されるのが、心身の不調なのである。

以上、近藤の要約であるが、施設に家庭で祭る火の神を持ち込むことはできないので、不安になるのである。明治期生まれの高齢者に多くみられるということから、かつての「男尊女卑」の世間にあっては定期的に心を開放しその安定をもたらす意義は大きかったといえよう。

火の神と仏壇を祭る女性

旧暦一日と十五日には、家庭の主婦はまず火の神に供物をささげて祭り、その供物から一品減らして仏壇にささげて祭る。家ごとに違いはあるが、例えば、米や泡盛の入ったびんなどと一緒に供物のお盆にのせたウブク（湯のみ茶碗にご飯を盛ったもの）を火の神には三つ、仏壇にはそれから一つ減らして二つとするようにするのである。火の神には三つというのは、火の神の象徴が三つの石であったことと関連している。

この時、火の神には家庭にかかわるあらゆること、例えば人の生死、結婚、病、旅立ち、転居、就職などを報告し、平安であるよう祈願し、感謝する。火の神を祭り終わると間を置かず供物をもって仏壇に移動する。現象面では一部の供物を減らすだけで対象に向き合い、手を合わせ報告、祈願、感謝をささげる姿は変わらない。対象の性格の変化に伴って意識の上でどのような違いがあるのかについては慎重にならなければならないが、近藤が記述した高齢の女性たちの徘徊行動の理由には、火の神が祭れないというだけでなく、仏壇とともに祭れないためと考えることはできないで

あろうか。つまり、旧暦一日と十五日の婦人による宗教実践からは、火の神と仏壇の連続性が指摘できるのではないだろうか。

旧暦一日と十五日に定期的に火の神と仏壇を祭るほかに、家族が旅行に出るときなどに随時祭っている。鳥越憲三郎は旅に出るものをまず火の神の前に跪かせて拝ませた後に仏壇の前で同じように拝ませ、オナリ神（旅人の姉妹）から盃を受け、母屋の出口でなく台所の側から旅立たせた、と記している。那覇の遊郭である辻のずり（遊女）に産ませた子（私生児）を迎えるときに、「ヒヌカンを拝ませたか？」といい、火の神に続いて仏壇を拝ませた。

このように火の神と仏壇は一体のものとして連続して拝むものであり、この点で言うならば火の神は先祖祭祀の欠かすことのできない「前触れ」である。つまり、いきなり仏壇を拝むことはできないのであって、まず火の神を拝み、それから仏壇を拝むということになる。

火の神と「おとほし」

火の神と仏壇の連続性に加えて、火の神の性格として強調されるのは折口が指摘した「おとほし」である。ウトゥーシウグァン（お通し御願）という用語があり、拝みに行きたいが、行けないときに火の神を通して行う御願である。例えば、分家がムートウヤ（元家）の法事に参加できない時に、火の神に向かってムートウヤの先祖に行けない理由を述べ、願いを通してもらうのである。このようなウトゥーシウグァンは火の神に対して随時行うことが出来る。

「おとうし」は折口も言うように火の神に限られるものではない。例えば、女神役たちが聖地を順に回りながら拝む行事の時に、途中で潮が満ちてしまって予定の拝所に行けなくなってしまったことがあった。その際には浜辺に供物を並べて回るべき聖地の方向に手を合わせて拝んでいた。こ

れをタンカーウガミという。タンカーというのは方向というほどの意味である。

最近のコロナウイルス感染を受けて旧盆のころに呼びかけがあったことが記憶に新しい。お盆の先祖を送る日には仏壇にはたくさんの飾り付けがなされ（写真6）、親類縁者がムートウヤに集まって会食し送り火をするのである。その際、感染を避けるために大勢が集まるのは避けた方が良いというので、自分の家からムートウヤの方にタンカーをとって手を合わせれば大丈夫である、と新聞紙上で宣伝された。これも「おとほし」が今日においても十分に効用があることを示している例である。



写真6 お盆の仏壇

火の神と仏壇の距離

以下に紹介するのは1975年に辺野古で聞かれた事例である。ある家庭で、戦争で亡くなった夫の霊が鎮まっているかどうか、沖縄本島中部のユタに聞きに行った時のことである。

その時までこの仏壇には長男系統の3世代分の位牌と、3代目ですでに亡くなっていた長男の弟（次男）の位牌が別々の位牌立てに分けて祭られていた。これは同世代の兄弟は同じ位牌立てに祀ってはいけないというチョーデーカサバイ（兄弟重合）といわれる位牌祭祀のタブーを反映している。長男系統は3代目に子孫がなくそれを一つの位牌立てに祭り、その弟は亡くなっていたので別に位牌立てを設けて祭っていたのである。

位牌はこのように二つに分けられており、次男はやがて分家することになっていた。一方、火の神は一つで亡くなった弟（次男）の妻が祭っていた。

ユタはこのようなその当時の位牌祭祀と火の神の祭祀に問題があると指摘した。現に祭祀が行われている火の神は、やがて決まる長男系統の跡継ぎの女性がまつるものとされ、新たに一つ火の神が増設されて、現に祭っている弟（次男）の妻はそれを祭るようになった。その理由をユタは「ヒヌカンとガンス（元祖・先祖のこと）は結ばれている」から、それに合うように火の神を増やしたというのである。これは火の神と位牌祭祀を対応させようとする考え方であり、この操作は依頼者の中で葛藤を生んで、結局ユタによって新たに増設された火の神は廃棄された。

ここから言えることは、先に見たような火の神と仏壇が連続した宗教実践とは別に、火の神と位牌の性格の違いがユタの指示に反発する形で現れたということである。このことは分家して間もない時点で火の神はあるが、仏壇や位牌はないという状態を考えるとわかりやすいかもしれない。ここには先祖との連続性ではなく、今生きる家庭の

成員を守護するという火の神の側面を見ることが出来る。そのためここに見てきた先祖祭祀との対応を目指したユタの指示と齟齬をきたしたのである。

ここに紹介したユタが位牌祭祀に関与した1975年ころは位牌の継承から女性が排除されていることが社会問題になっていて、新聞誌上でも大きな議論が展開され『トートーメー考』（1980年）などが出版された。そこではユタの関与が否定的に扱われ撲滅すべきものとされた。琉球国ころにもユタの禁令がたびたび出され、支配層から社会的に有害とみられる面はあった。しかし、ユタは集落の人々の側からすれば、もともとなかった新たな考え方を導入する役割を持っており、次に述べるように門中の形成が遅かった沖縄本島北部の人々にとっては、位牌祭祀の四つのタブーに触れることになるのもユタを通してのことであった。とりわけ、社会が混乱している場合には、一貫した論理を与えることにより、人々に納得を得ることも可能であるから、ユタを悪者と決めつけることもできないのである。1975年のユタの判示は火の神祭祀を位牌祭祀に接近させ、一貫した秩序をもたらそうとしている四つのタブーの延長上にある発想ということもできる。依頼者に葛藤を生じてユタの判示を拒否したということから、火の神の位牌祭祀との連続性とは別の側面が表出したと言える。

門中と墓

門中は父系的な親族関係者の集まりで、機能としては主に先祖祭祀を行う。沖縄本島の南部では発達しているが、北部で門中が浸透してくるのは大正期ころである。それまである家で祭られていた先祖を祭る香炉が、別の系統に移されたり、南部から来た系図屋に新たに系図を作らせるといった動きがあった。

それ以前に父系的な親族の認識がなかったわけ

ではない。それは集落の女性神役が一定の父系的なつながりの中から選ばれてきたことから明らかである。

久志には門中で作った墓があり、入り口に「〇〇一門之墓」と書かれた石塔がある場合もある。墓には「門中」でなく「一門」が使われている。

彼岸節の次の清明節にはシーミー（清明祭）と呼ばれる墓参りの行事がある。門中ごとに墓前に集まり供物して先祖を祭る（写真7・8）。この日は集落から人の気配がなくなるほど一斉に墓に向かい、門中墓の前の広場に集まって久しぶりの再会に話が弾む。墓前では主に男性が祭り、女性は供物などの準備をしてそれに従うことが多いようである。集落の外にムートゥヤがある場合には、その地にある門中墓に行く。



写真7 シーミー（清明祭）の墓前（久志）



写真8 墓前での祭り（久志）

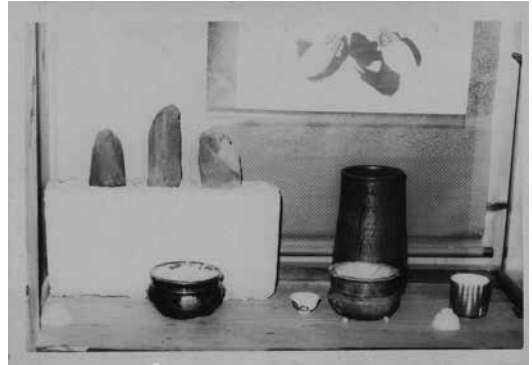


写真9 門中の火の神（久志）

シーミーの墓前祭に対応する火の神の祭祀はない。つまり、門中墓に対応する火の神はない。例外的に久志のある門中のムートゥヤの一番座に、門中で祭る火の神がある（写真9）。これは旧暦5月15日にウマチーといって門中成員が集まる機会に、クディングァという門中レベルの女性神役が祭る。墓の祭祀とは関連しない。

葬儀に当たっていったん棺を墓に入れ、一定の時間がたつと洗骨をして改葬していた。このため門中墓は中に人が入れるくらいの大きさがあり、墓の前には複数の家系の数十人が集まれるくらいの広さの空間がある。洗骨は女性が主に担当していた。

さらに門中墓が作られる以前は、ムラバカといって集落のはずれに共同の墓地があり、昼でもうっそうとした木々の中であって近寄るのも恐ろしいと言われるところであった。そこに遺体を置き、一定の期間ののちに洗骨を行い、甕に納めて安置していた。人々の記憶にはしっかり残っている。久志では西のはずれの川向うにあったが、戦後は宅地として開発され、墓地はさらに西側の丘陵地帯に移動し、ムラバカはその一角に石碑を立てられている。

最近は火葬が普通になり、洗骨・改葬をしなくてよくなったため、大きな門中墓は必要でなくなった。そのためもあって、それぞれの家系に分かれて「家族墓」と呼ばれる形態が増えてきてい

る。複数の家系が一緒に納骨されていた門中墓から、個々の家系の遺骨が取り出されて家族墓を作るということも見られる。辺野古ではほとんどの墓地がこの形態となっており、そうなると先祖祭祀を共に行うという門中の機能は、墓前祭の実施という点では欠落することになる。

集落レベルにおける火の神と先祖

辺野古の例でいうならば、集落レベルの火の神はネガミ（根神）がネガミヤ（根神屋）で祭るネガミヒヌカンである。一方、集落の祖先が祭られているのは、辺野古の草分けの家とされるトゥンチ（殿内）の一番座にあるカミウタナ（神御棚）である。ここにはアジとウナザラ（按司と妻）あるいはウミキィ・ウミナイガミ（兄弟神）を祭ると言われる香炉が並んでいる。

彼岸とアザシーミー（字清明祭）にはネガミが初めにネガミヒヌカンに線香を立てて拝み（写真10）、それからトゥンチに行ってカミウタナを祭る。これは一般の家庭で主婦が初めに火の神を祭り、それから仏壇を祭るとの構図としては同じである。

アザシーミーの時にはトゥンチから集落に縁のある遠祖を祭る古墓を巡拝する。その際にはトゥンチ一家、女神役、区長と集落の事務員が同行し、ネガミが使う供物は区で準備される。巡拝が終わると浜辺に供物の重箱を広げて寛ぐ（写真11）。



写真10 彼岸にヒヌカンを祭るネガミ（辺野古）



写真11 アザシーミーの巡拝が終わり寛ぐ人々（辺野古）

ウタキ（御嶽）と祖先祭祀

仲松弥秀によれば、『琉球国由来記』各処祭祀篇には首里29、那覇・泊8、島尻297、中頭210、国頭（伊江島を含む）143、伊平屋諸島22、島島7、粟国島9、渡名喜島6、久米島29、慶良間諸島37、宮古29、八重山76の御嶽が記されている。久志間切の久志・辺野古の部分には次のように記載されている。

久志間切

ヨリアゲコダ嶽 神名 ヨグスクノ御イベ 久志村

マヒラテリ嶽 神名 ワカツカサノ御イベ 同村

ミアゲ森御イベ 不伝神名 同村

ミヤチ嶽 神名 オセジノ御イベ 辺野古村

マシラテ嶽 神名 ツカサノ御イベ 同村

右五ヶ所、久志巫タカベ所

このうち、現在久志の一か所の御嶽が『琉球国由来記』の記載個所に比定されるだけで、ほかは現状とどのような関係にあるかわからない。今日までに変遷があったかもしれないが、先祖祭祀との関連で、次の仲松弥秀の見解が参考になる。

祖霊神とは、村の鎮守の神であり、・・・鎮座している御嶽を「腰当森」（くさてもい）と称する。・・・その村人の遠い先祖たちの霊が宿っている。いわば古代の葬所の場所であったのである。クサテ森といわれているものの中には必ずといってよいほど納骨された場所がある。この神骨は「骨神」（ふにしん）といわれ、大切に保管されてきたものである。

御嶽の一部に納骨された痕跡があるならば、ウタキの祭祀が遠い祖先を祭る意味があるのであろうが、久志・辺野古の御嶽にはそうした言い伝えはなく、四角い石の香炉が置かれ一年に数回女神役が巡拝しているだけである（写真12）。



写真12 クシヌウタキ（後ろの御嶽）を祭る女神役（辺野古）

辺野古のウタキは集落を取り囲むようにクシヌウタキ（後ろの御嶽）、メーヌウタキ（前の御嶽）、ニーヌウタキ（子＝北の御嶽）の三つである。

1月2日と12月24日の午前中には、ネガミラ女神役がウタキを巡拝するタキウガミが行われる。1月は一年の集落の人々の健康と繁栄を祈願し、12月は一年の感謝をささげる。1月には午後にいわれのある川、泉を巡拝するカーメー（川拝み）がタキウガミに続いて行われる。飲み水に使ったり、産水や湯かんに使ったり、イノシシの解体の際に使ったり、といずれも先祖が生活の中で使った水のオン（恩）に感謝するためである。石の香炉に相当するものが置かれているが、線香に火はつけないでおくだけである（写真13）。



写真13 ウブガーで拝む女神役（辺野古）

水は人が生きるために欠かせないもので、辺野古では戦後に米軍基地ができて排水が混入するなどして使用に耐えなくなったとはいえ、それ以前から祭っていたところで祭ることは継続している。そこに水神というべき神の存在を認めることはなく、先祖から使ってきたオン（恩）に対して謝するという気持ちである。

最後に

タイトルには沖縄の祖先祭祀としてあるが、主に沖縄本島の北部の二つの集落の例をあげながら、検討してきた。

先祖を祭るといって仏壇で行うもの、とまず考えるだろうが、仏壇に供物を置いて祭る前に、火の神を祭るのである。これまでの先行研究では火の神と仏壇を別個にとらえる傾向にあり、ここで述べたように両者を関連付けての検討が必要ではないだろうか。そこから分かるのは宗教実践としての火の神と仏壇の連続性と、現生の家庭の成員を守護する火の神の仏壇と相反する性格である。

家庭で祭る火の神と仏壇の関係を、集落レベルで見ると、辺野古のネガミの祭るネガミヒヌカンとトゥンチの神御棚の関係が対比できる。神御棚には辺野古の遠い先祖が祭られている。ネガミはムラシーミー（集落レベルの清明祭）では遠祖が葬られている墓地も祭る。

これらは琉球王府によって作られた聞得大君をトップに据え、首里の三平等の大阿母志良礼の配下に各地のノロ火の神が置かれた体制とはリンクしない。

墓地は集落のはずれにムラバカがあり、そこで改葬ののちに甕に納められていた。甕の蓋に名前が記されていて、個人を特定できた。やがて門中墓が作られシーミーの墓前祭が行われるようになり、男性が主体となって先祖を祭るようになった。

女性が祭る火の神は墓の祭祀と関連しない。また、門中のいくつかではムートウヤの一番座に門

中火の神を置き旧暦5月15日に祭る例があるが、これも墓と関連付けはない。門中の導入が遅かったことが関わるかもしれないが、火の神と墓の祭祀は関連が見られない。

ウタキ（御嶽）は琉球国の時代から記録されており、久志・辺野古ではそれ自体が古代の墓地という証拠はない言い伝えもない。女神役の年中祭祀の中で定期的に巡拝し、集落の人々のために感謝と祈願を行う。1月には引き続き川と泉を巡拝して、先祖が生活の中で使った水のオン（恩）を感謝するという点で、先祖とのかかわりがある。

『琉球国由来記』に記載された御嶽が現在の御嶽に比定できないように、火の神も仏壇も変遷を経て今日に至っている。沖縄本島の中でも地域差は大きいし、最近では「墓じまい」など先祖の祭り方は大きく変わろうとしている。変化の中でとらえるには、まずかつての様相を押さえる必要がある。不十分ながらそうした意図をもって検討した。

参考文献

- 安達義弘 1988 「琉球王府の中央集権体制と火神信仰」『沖縄の宗教と民俗』第一書房
- 折口信夫 1975 (1923) 「琉球の宗教」『折口信夫全集』第2巻古代研究 中央公論社
- 1976 (1947) 「女の香炉」『折口信夫全集』第17巻 中央公論社
- 近藤功行 2003 「文化・儀礼・宗教・祭祀」『介護福祉学習辞典』医歯学出版
- 鳥越憲三郎 1965 『琉球宗教史の研究』角川書店
- 仲松弥秀 1990 『神と村』新泉社
- 古家信平 1994 『火と水の民俗文化誌』吉川弘文館
- 琉球新報社編 1980 『トートナー考』琉球新報社